香山リカが見た被災地公務員の苦悩

誰からも評価されない

東日本大震災から1年半。被災者の心の傷は癒えることがないが、中でも支援にあたる公務員が極度のストレス状態にある。公務員のケアにあたってきた香山リカさんが現状をルポする。

精神科医　香山リカ

被災自治体では大学の専門家などと連携し、健康調査や心のケアも進めている

「いまだに毎日が忙しさのピークですね」

「みんな今年になってからのほうがしんどそうですね。ここまではがんばってきたが、息切れしている」

「最近、よく震災直後のことを思い出し、一気につらさや疲れが出てきました」

これらはいずれも、今年の春以降、東日本大震災の被災地の市役所や保健所などで働く職員、つまり公務員から直接聞いた言葉だ。彼らの中には現在、直接、復興業務に携わっている人もいれば、そうでない人もいる。自らも自宅が全壊したり家族を失ったりと「被災者」である人も、そこまでの被害は受けていない人もいる。

しかし、いずれにしても大震災や原発事故は、被災地の公務員たちの仕事や生活を一変させてしまった。そして、それによって彼らの心身は極限まで追い詰められており、さらにそのことに気づき、手を差し伸べる動きはいまだにほとんどない、というのが現状なのだ。

役に立たない焦り

8月24日、新聞はひとりの公務員の自殺について報じた。35歳の男性職員は岩手県盛岡市から陸前高田市に派遣され、震災復興業務に携わっていたという。職員が縊死を遂げた同県遠野市の国道脇の自家用車内からは、父親にあてた「希望して被災地に行ったが、役に立てず申し訳ない」という内容の遺書が見つかっている。職員はもともとは道路管理課に所属しており、陸前高田では壊滅的な被害を受けた漁港を復旧するという慣れない業務に携わっていた。

陸前高田ではないのだが、やはり他地域から漁港の復旧のために派遣されたある職員から聞いたことがある。

「前向きな仕事だから、やりがいはあるんです。でも、限られた派遣期間内で結果を出さなければならないし、自分には何もできない、役に立たないという焦りがひどい。いまは民間の寮にいるんだけど、入浴時間までに帰れないから風呂なしの日も多いし。自分らのように内陸部から派遣されている人間は、もともと沿岸にいる人たちとの〝温度差〟にも気を使うね……」

私は現在、自治労と協力して「被災地で働く公務員のこころのケア事業」に携わっている。具体的には被災3県で、臨床心理士などによるカウンセリング方式の「こころの相談室」、数十人規模で行うセミナー、10人

香山さんはこの夏も岩手・盛岡や宮城・気仙沼で公務員の人たちの相談に乗った。心の問題を抱えた公務員に対するケアはまだ十分とは言えない

photo　朝日新聞社（上、62、63ページも）　編集部・岩田智博（下）

単位の座談会、そして家族も含めた職員への「ありがとうコンサート」などを行い、9月からは週に2回の電話相談もスタートする予定になっている。

こうした活動に参加している理由はふたつ、被災地の公務員の心はストレスで極限状態にあると考えられること、そしてそのケアが驚くほど遅れているからである。

なぜ公務員の心のケアが必要なのか。

今回のような大災害が起きると、被災者はもちろん、救援、支援や報道などに携わる人たちも心に大きなダメージを受けることが知られている。これは「惨事ストレス」と呼ばれ、災害が起きた直後の不眠、興奮状態、自責や抑うつなどの感情の変化だけではなく、それが数カ月以上長引いて、フラッシュバックを伴うPTSD（心的外傷後ストレス障害）や燃え尽き症候群、うつ病に移行するケースも見られる。こういった重篤な心の危機状態は、被災者よりもむしろ救援者、支援者に起こりやすいというデータ、また災害発生直後よりも1～3年経過してからが発症のピークとなる、という報告もある。

では、なぜ被災者ではなくて支援者がより重いストレス状況に陥りやすいのか。この問題にくわしい防衛医科大学校精神科の重村淳講師は、いくつかの条件が重なった場合、支援者に「惨事ストレス」が起きるとして、次のような要素をあげている。

「社会的な責任が大きい」「混乱した状況の中、迅速な対応を求められる」「過重労働」「自らも被災者」「ご遺体、ご遺族とのかかわり」「心の準備がない」――。

これらはまさに、被災地の公務員たちが置かれている状態とぴったり一致する。

果てしない業務

「震災が起きる瞬間まではパソコンで書類を作る業務だった。それが次の日には遺体安置所でご遺体の衣類を洗浄していました。その後は土葬の手伝いをして、また掘り起こして火葬にして……」

「実は私のところの家族も行方不明になったんです。でも、避難所で寝泊まりしろ、と指示が出て。本当は早く安置所回りをして見つけてやりたかった」

「支援物資が来ると、まずは住民優先ですからね。市庁舎に寝泊まりしている職員は、賞味期限の切れたパンやおにぎりを、それも1個だけ、という日が続いた」

「役場のテレビで自宅が津波に流される映像を見た。あ、オレん家だと思ったけれど、住民や部下のことを思ったら帰るわけにもいかなかった」

そんな生活が何カ月も続く。

さらに仮設住宅ができればそこへの入居を手伝ったり、新しい都市計画を練ったり、と業務は果てしない。また罹災証明書の発行、死亡届などの各種手続き、義援金の分配など、住民と直接接する業務の中では、激しいクレームを受ける場面も少なくない。

「復興も進まないし、住民もだんだんイライラしてくるのはわかるんです。でも、何時間も怒鳴られ続けたり、土下座しろと言われたりしていると、だんだんこっちまでまいってくるんだよね」

遺体や行方不明者の捜索、仮庁舎での業務……。自らも被災しながら慣れない仕事でのストレスはたまっていく

「こころの相談室」でようやくそういった思いを吐き出した職員は、すでに軽いうつ状態に陥っていると考えられたため、地元の医療機関の受診を勧めた。そうすると、彼はこう言って首を横に振った。

「医者になんか通ってるところを見られたら、また地元の人たちから何と思われるか。やっぱり公務員は甘いんだ、自分たちは仕事も失ったのにあいつらは税金で高い給料もらって、と思われるよ。もう少し自分でがんばってみるから」

一方的な批判や非難

被災地で超人的な働きを続ける公務員たちにさらに追い打ちをかけているのが、彼らに対する評価があまりにも低いこと、それどころか一方的な批判や非難が寄せられることなのだ。

あるとき、同じく「支援者のケア」に携わる精神科医の中でも、被災地に出動した自衛隊員のケアにあたっている人と話す機会があった。そこで彼がおもしろい話をしてくれた。

「今回の自衛隊員の任務はたいへんきついものではあったけれど、彼らは〝報われた〟という気持ちは十分に味わっていて、それが心を癒やす働きをしてい

る。彼らの働きはテレビでも繰り返し報道されたし、『ありがとう』といった感謝の手紙も全国から届いている」

そういえば、航空自衛隊松島基地には長渕剛が出かけて慰労のライブが開かれた。自衛隊員だけではない。昨年、横浜の元町で行われた防災パレードでは、消防隊員に対して「被災地での支援ありがとう!!」と書かれた横断幕が掲げられ、彼らの活動への感謝が表現された。

橋下路線狙う首長

一方、公務員はどうだろう。橋下改革の影響もあってか、公務員の評価は全国的に下がりっぱなしだ。それは被災地の公務員に対してもどうやら同じようで、被災地以外の人からも、「なぜ被災者への対応がこんなに遅いのか」「ちゃんと仕事をしていないのではないか」といった批判的なメールが寄せられることもあるのだという。公務員たちにしても、何も長渕剛に来てもらいたいとか感謝の横断幕を持ってパレードしてほしいなどと思っているわけではないはずだ。せめて「大変ですね。お疲れさま」といった程度の感謝の声があれば、「報われた」「がんばってよかった」と疲れやストレスも半減するのではないだろうか。ところが、事態はまったく逆なのだ。

その上、いくつかの自治体では「首長までが自分たちを守ってくれない」という話を聞いた。「まだトップが『がんばってくれてるね』と認めてくれれば、ちょっとは救われるんだけど、住民に向かって『まだまだ職員にはやらせなきゃ』とか『残業代はカットします』とか、なんだか公務員叩きみたいなことを強調しようとするんだよね。パフォーマンスっていうのかな」

身内に厳しくし、〝ミニ橋下路線〟を狙うことで有権者の支持を得ようとしているのだろうか。しかし、そんなことをしても下で働く人たちのモチベーションが下がるだけで、復興への道は遠のくばかりだ。

継続的なケア体制を

公務員バッシングの嵐の中、中央でも「被災地公務員の心のケアを」という動きはなかなか一本化されなかった。復興予算は配分し尽くせないほどあるのに、そこから「公務員ケア」にお金やマンパワーを割くのは、「被災者が優先のはずだ」という国民の反発につながるのではないか、と二の足を踏むムードがあったのだ。

今年になってようやく地方公務員災害補償基金からまとまった予算が組まれることが決まったが、いまだに「全員の面談」や「継続的な相談体制」などの実施には至っていない。

自らも被災しながら「住民のために、地域のために」とがんばり続ける公務員たち。彼らのがんばりが十分に評価され、そこで受けた心身の疲れや傷に対しては社会の責任で手当てをする。それは誰が考えても当然のことであり、同時に被災地の公務員が健康な状態でなければ、結果的には復興が遅れるばかりで誰にとってもメリットはないはずだ。

被災地にまで及ぶ無用な「公務員叩き」が続く限り、本当の意味でのニッポンの復興が訪れることはないだろう。

朝日新聞出版
創立5周年記念作品

読むほどに胸がつまる。それでもページをめくる手が止まらない!

ふくわらい

マルキ・ド・サドをもじって名づけられた書籍編集者の鳴木戸定。
幼い頃、誰もが目を覆うような特異な体験をした定は、日常を機械的に送るようになる。しかし、心の奥にしまいこんでいた思いに気づいた瞬間、彼女の心の壁は崩れ去り、熱い感情が、とめどなく溢れ出すのだった——。

西加奈子

1,575円(税込) 四六判上製
ISBN 978-4-02-250998-7

映画『きいろいゾウ』(2013年公開予定)の原作者による、
本年度、最大級の感動作!

写真:篠塚ようこ

お求めは書店、
ASA(朝日新聞販売所)でどうぞ。
ASAHI 朝日新聞出版